



『妊娠』

あなたの妊娠と出生前検査の
経験をおしえてください』

評者・石川 紀子 愛育病院

これまでになかった「妊娠」に関する本が出版されました。と言っても医師や助産師が書いた医学専門書ではありません。女性の妊娠、そして出生前検査をめぐる経験について社会学の視点から書かれた本です。375人の女性へのアンケート調査結果と26人の女性へのインタビュー結果がまとめられています。本書は3部で構成され、第Ⅰ部は「アンケート編」、第Ⅱ部は「インタビュー編」、第Ⅲ部は「調査からわかったこと」です。

産む女性が抱えるさまざまな不安の中で「無事に元気な子どもが生まれてくるのか」は、多くの妊婦に共通しています。これに答える1つの手段としてクワトロ検査や羊水検査などの出生前検査があり、それらを紹介している病院も増えてきているようです。この検査について医療者は、あくまで「情報提供」し、検査を受けるか否かは「自己決定」であるという姿勢です。喜びの「妊娠」の中で「生命倫理」という重い問題を意識していなかった女性が、思わぬ意思決定をせまられるわけです。

本書は、出生前検査を受けた女性だけでなく、受けなかった女性に対してもその経験がどういうものだったかを聞いています。医療者は、情報提供しておきながらその選択は産む女性とその家族の問題としていいのだろうか、女性たちの語りから考えさせられます。女性た

日本で妊娠するとは どんな経験なのか



柘植 あづみ・菅野 摂子・石黒 眞里 著
定価 2940 円(本体 2800 円+税 5%)
四六判/洛北出版/2009 年

ちの葛藤や意思決定のプロセスに寄り添うかわりはとても大切で、助産師が果たす役割は大きいと感じました。

産科外来で日常的に行なわれている超音波検査についても質問されています。超音波検査は、妊婦健診のたびに受ける当たり前の検査になっており、ほとんどの妊婦は超音波画像を楽しみにしています。しかしこの検査は出生前検査の側面があるにもかかわらず、妊婦に十分な説明をして同意を得てからという認識が医療者にあまりありません。超音波検査は毎回行なう当然の検査なのか、検査を受ける女性の意思が反映されている

かを見直す必要がありそうです。

また、産科の外来診療では、胎児の状態や妊娠経過に対する診断が優先されています。安全な出産を絶対目標として、妊娠・出産は医療の管理下に置かれているのが現状です。果たして安全を追求したお産は、女性を幸せにしているのでしょうか。著者の柘植氏は「出産が医療の中に取り込まれた故に女性が出産について孤独を感じる」と述べています。これは多くの助産師が実感していることでもあるでしょう。

少子化対策が進む中、子どもを産むということには社会的な意味が付きまとい、それが女性にとってプレッシャーになっていることが指摘されています。女性に寄り添う助産師は、本書を読んで女性たちの声を胸に刻みたいものです。